

第26期 第1回滋賀県スポーツ推進審議会議事録

- 1 日 時：令和8年（2026年）9月3日（木）13:15～14:45
- 2 場 所：滋賀県庁本館4階4A会議室
※オンライン（Zoom）併用
- 3 出席委員：泉岡 亜里砂、大西 久美子、門 久仁裕、崎山 美智子、
佐藤 馨、土屋 裕睦、永浜 明子、宮川 一朗、藪田 守彦、
涌井 努、渡邊 孝宏
欠席委員：岩永 裕貴、大谷 未央、田中 ゆかり、名谷 美咲
（五十音順、敬称略）
- 4 次 第
 - 1 開 会
 - 2 議 事
 - (1) 審議会会長および副会長の選出について
 - (2) 国スポ・障スポのレガシーの継承・発展について
 - (3) 滋賀県スポーツ推進計画について
 - 3 その他
 - 4 閉 会

【配付資料】

- 資料1 第26期滋賀県スポーツ推進審議会委員名簿
- 資料2 国スポ・障スポのレガシーの継承・発展
- 資料3 第4期滋賀県スポーツ推進計画の策定スケジュール（案）
- 資料4 第3期滋賀県スポーツ推進計画（概要版）
- 資料5 第3期滋賀県スポーツ推進計画に基づく施策の実施状況説明書（概要版）
- 資料6 第3期滋賀県スポーツ推進計画に基づく施策の実施状況説明書
- 参考資料1 滋賀県スポーツ推進条例
- 参考資料2 滋賀県スポーツ推進審議会条例
（冊子）第3期滋賀県スポーツ推進計画

5 議事概要

- (1) 審議会会長および副会長の選出について
 - ・ 涌井委員から永浜委員を会長に推薦する旨の発言があり、委員から異議なしの声。
永浜委員が承諾されたことから、永浜委員を会長に決定。
 - ・ 永浜委員から門委員を副会長に推薦する旨の発言があり、委員から異議なしの声。
門委員が承諾されたことから、門委員を副会長に決定。
- (2) 国スポ・障スポのレガシーの継承・発展について

(会長)

委員の皆様の中にも国スポ・障スポに関係された方もおられると思うが、両大会を振り返っていただき、感想でもどのような内容でも結構なので、御発言をお願いしたい。

(委員)

いくつかの会場に応援に回らせてもらったが、小学生がたくさん応援に来ており、練習もしてきたのかと思うが、すごい声援で滋賀県チーム以外のチームも応援されており、すごく良かったと感じた。他県の方からもそのようなお声を聞いたので、すばらしいなと感激した。

また、スタッフやボランティアの方々がゴミの仕分けを細かくされており、すばらしかった。選手の方々はもちろんだが、ボランティアの方々や応援する方々もがんばっておられ、感動をいただいた。

(委員)

甲賀市のスポーツ推進委員として、市から「障害者スポーツへの協力をお願いします。」と言われたので、そちらの対応を行っていた。国スポの初日に雨が降っていたと思うが、甲賀市が担当していた軟式野球において、小学生が相手チームの名前を呼びながら、知らない人にも関わらず「がんばれ！がんばれ！」と雨の中で応援していたのを見た。しっかりと指導が行き届いているように感じた。

障スポについては、甲賀市がボッチャとフライングディスクの会場となっており、私はボッチャを担当していた。資料に載っているようなおもてなしのお弁当は、きっと偉い方や選手の方が食べたのだと思うが、私たちの食べた3日間のお弁当は、冷たいお弁当だったので残念だった。それよりも何よりも選手の方のエネルギーがすごかったのを覚えている。甲賀市ではボッチャをレガシースポーツにしようと、市長杯のボッチャ大会を開催したりしているが、市民に呼び掛けると、多くの市民が参加しようとしてくれるので、そのような広がりがとても印象的だと感じている。

(委員)

私は、「滋賀県手をつなぐ育成会」という障害のある子どもを持つ親の会に所属している。国スポ・障スポに関しては、10年間ほど関わらせていただいた。10年以上前に障スポが開催されると聞いた際には、「どうするのよ。選手なんかいないじゃない。」と思っていた。そういった意味で本当に育てていくということの大切さを痛感した。10年前となると、小学校4年生や5年生の子どもがスポーツに親しむところから始めるということになるが、この障害者スポーツというのは、保護者の同意や協力を得ないとたちうちができない。ある母子家庭の話だが、お母さんが目覚められて、この子をこのスポーツでということ、本当に大変な中、経済的にも大変な中でとてもがんばってくれた。そのお母さんは、大会当日に競技のコーチをしてくださるぐらいまで応援されていた。そのご家族だけ見ても大きな成長があったと思う。

今後は、この障害者スポーツをレガシーと言いながらもシュンとさせてしまうのではなく、やはり私達が繋いでいかなければいけないのではないかなと思う。このせつかく

の大会が後になってしぼんでしまうようでは、「滋賀県やっぱりあかんかったか。」と言われてしまうと思うので、この国スポ・障スポを機にもっと滋賀県のスポーツを盛り上げていきたいと思う。

(委員)

昨年度、現3年生が全国障害者スポーツ大会のボランティアとして参加させていただいた。本学では「障害者スポーツ」という講義を設け、学生に障害に関する基礎知識を伝えている。しかしながら、大会終了後に実施したアンケートでは、「講義で学んだ内容だけでは十分ではなく、実際にはもっと配慮すべき点があった。」という感想が寄せられた。

このような反省の声があった一方で、学生たちは様々な障害やその特性について実際に体験しながら学ぶことができた。学生は障害のある人がいることを知識として理解していても、それを実感を伴って理解する機会は決して多くはない。今回、大会運営を支援する中で、障害の多様性を肌で感じるとともに、大学で学んだ知識を実践の場で活かしながら、自らの気づきを得ることができたことは非常に大きな学びであったと考えている。

本来であれば本学としてもさらに多くの学生をボランティアとして派遣したいところであるが、このような貴重な機会をいただいたことで、学生たちは「支えるスポーツ」の重要性や意義を強く意識できた。その意味でも、本大会は学生にとって大変有意義であり、本学としても深く感謝している。

(委員)

私は滋賀県障害者スポーツ協会の卓球競技の担当をしているが、卓球競技には一般卓球とサウンドテーブルテニスという2つの競技がある。そのうち私はサウンドテーブルテニスの担当をしている。サウンドテーブルテニスはSTTと言うが、以前は盲人卓球とも言われていた。視覚障害のある方の卓球だが、その競技のヘッドコーチをしており、この滋賀大会にも4名の選手が参加した。私は第1回から大会に関わっているが、STTの選手の派遣は滋賀県ではこれまではなかった。ずっと該当者なしということで、一般卓球の選手のみを全国大会に派遣してきたが、滋賀大会を迎えるにあたりSTTの選手を育成して派遣しようと、滋賀大会の前年の佐賀大会から2名の選手を派遣するということが実現した。

県大会では、STTの競技もやっていたが、以前は全て盲学校の先生に依存するような形で進めてきた。しかし、滋賀大会を開くからには滋賀県内で指導者や審判員を養成しなければならないということで、選手の発掘と同時に指導者や審判員の育成も進めてきた。滋賀大会には4名の選手が参加し、全員がメダルを取ろうということを目指にがんばってきたが、全員メダルをとることができ、金メダル1つ、銀メダル1つ、銅メダル2つという結果だった。

滋賀大会を契機に、選手の発掘や指導者・審判員などの養成は、かなり大きく飛躍したと思うが、今後、この拡大した基盤をどのようにして継続していくかということが課題だと感じている。若い選手も参加するようになったが、参加選手が固定化しているため、新しい選手をどのようにして発掘していくか、また、私も含めてだんだん

と高齢化してきているので、若い審判員や指導者をどのようにして養成していくかということが大きな課題だと思っている。

また、私は滋賀県卓球バレー協会にも関わっているが、皆さん卓球バレーを御存知でしょうか。卓球台を使ったバレーボールのようなものだが、元々は障害の重い車椅子の人たちでも参加できる競技をということで、養護学校で始められた日本発祥のスポーツだが、私は滋賀県の卓球バレー協会の設立にも関わっており、滋賀大会を契機として、10月12日にオープン競技として栗東市で卓球バレーの全国大会を開催し、全国から16チームが参加し競技を楽しんだ。それを契機に滋賀県内でも卓球バレーを楽しもうということで、講習会が行われたりクラブチームが形成されたりしており、機運が高まってきている。卓球バレーというのは、障害の有無や老若男女関係なく、みんなが楽しめるスポーツであり、この機運を今後どのようにして継続させていくかということが大切だと思っている。選手も練習をがんばっているので、練習の成果が発表できるような大会を開催するなど、取組を継続させていく必要があると考えている。

(委員)

国スポ・障スポには、中学生や小学生が歓迎の場面や競技の見学という形で参加することが多かった。正直なところ、学校に動員がかかるので、職員は「連れて行くのが大変だな。」という感じが最初はあったように思う。しかし、小学生が開会式に参加し、あのような立派な開会式を見て本当に感動していた。子どもの心に残ったものというのは、大変大きな財産だと感じている。中学生もハンドボールや陸上競技の観戦に行ったが、「行ってよかった。」というのが子どもたちの感想だった。本当にそのような感動を大事にしたいと思う。

私は、愛荘町のアーチェリー競技にも役員として参加したが、町民の皆さんの熱意を肌で感じた。それぞれの市町で各競技を開催したということではあったが、このような形で県全体の熱が高まったと感じている。それを今後、どのようにして残していくのかというところをしっかりと考えていきたいと考えている。

(委員)

私が小学校時代、その当時は国民体育大会だったが、体育館で練習した思い出があり、当日はお遊戯のようなことをやったというかすかな記憶がある。幼少期の頃は、大人がどのようなことをやっているのかというのは全くわからなかったが、現実的に44年ぶりに開催されて、その思い出が今、これはこういうことだったのだと気づかされた。県や市町、大人、企業、地域など、これだけ大勢の方々がこの国スポ・障スポの開催に向けて、準備から開催まで多くの時間と労力をかけてこられ、無事に終了したということは、とてもすごいことだと改めて実感した。

また、私は守山市において競技開催に向け、競技団体の方々と準備してきたが、最初は「本当にできるのかな。」というところから始まって、一つ一つ積み重ねていくことによって、様々な団体が一緒に力を合わせ始め、最終的にはこのような形ができあがった。もちろんそれぞれの競技も大事だとは思いますが、地域とスポーツが1つになるということが非常に大事なキーワードであり、スポーツの力でまずリンクをし、スポ

一つでまちや地域を元気にするという相乗効果を生み出した1つの祭典だったと思う。

その祭典が終わったわけだが、一番大事なのはこれからだと思う。各競技団体、大人の方々、様々な職業の方々、行政、民間、教育といった様々な立場で、レガシーとしてこれからどのようなことをやっていくかが一番大事だと思っている。滋賀県には三方よしという言葉があるが、これからは三方よしではなく、五方よし、六方よしと、様々なところが協力しながら物事を作り上げていくことが重要だと思う。国スポ・障スポの開催にあたっては、莫大な費用がかかったと思うが、むしろこれからの方が大事だと思う。子どもたちや次の世代に向け、私たちは何をやるべきなのか。行政も民間も企業も力を合わせて、どのように進めていくのか。ここには様々な立場の方が集まっておられるので、レガシーについて皆さんの御意見を聞きたいと思っている。

(委員)

皆さんの話を聞いて大変勉強になっている。私は大阪におり、少し距離をとって見ていたのかなということを改めて感じた。

佐賀の国スポから始まって、どのような形で国体から国スポに定着するかなという視点でも見ていたが、そのような観点では1981年のびわこ国体と比べると、環境への配慮や共生社会の実現など、やはり滋賀県でないとできないことがいくつか達成されたということが非常に大きいことだと感じた。

また、競技力向上という観点では、天皇杯・皇后杯を獲得したというのは、すごいことだと思っている。競技団体の方々の取組を少し離れたところから見てきたが、これを達成するためには、一致団結しないとできないことだと思ったので、それぞれの競技団体の横の繋がりなども含めて大きな成果だったと思う。

例えば、剣道の成年女子で、決勝の相手は岡山だったが、相手の大将は七段の方で世界大会でも優勝するような選手だった。一方、滋賀の大将は四段の教員の方でこの国スポでの代表を目指して復帰され見事に勝利された。まさに「私が輝く」ということで、彼女はこの滋賀の国スポがなければ復帰もしなかっただろうし、日本一になることはなかったかもしれない。そのような物語を身近に見ることができた。改めて天皇杯・皇后杯を獲得したというのは大きな成果だと思っている。そういった点では第3期の計画の中でしっかりとそのような目標が立てられていたというのはいいことだなと、そうすると第4期の計画を立てるにあたって、こういった成果を振り返り、かつ見通しを立ててやっていくということが重要だということが学びになった。

いずれにせよ滋賀県のみなさんのがんばりに勇気づけられ、そしてその滋賀県が日本一になるということで、素晴らしい大会だったと思う。障スポについても同じようなことが言えるが、時間の関係もあると思うので改めてお話ししたいと思う。

(会長)

この後、事務局にスポーツ推進計画について御説明いただいて、質問の時間をとることになっているが、時間の関係上、推進計画については、次回の審議会までに各自が確認しておいていただくこととし、このままこのテーマを続けさせてもらいたいと

思う。

(委員)

びわこビジターズビューローに着任したのがこの4月になるが、国スポ・障スポ当時は民間企業に勤めており、大会の宿泊や輸送計画などに関わる企業で勤務していた。その当時の話をすると、3年前頃から宿泊の手配などが地道に行われており、私は直接関わってきたわけではないが、各競技団体様との調整など、非常に時間を要しながら、丁寧に受け入れ環境の整備が進められてきた。私はこの動画で、このように晴れやかに賑わいながら、楽しく実施されている様子を見て、苦勞してきたことが報われたと感じた。

ボランティアの方もそうだが、官民学といった様々な方々の連携で、なかなかやりたくてもできる機会がないような一つのビッグイベントを皆さんの力で成功に導いたということ自体が一つの大きな成果だったと感じた。

(委員)

私はスポーツ協会の立場で出席しているが、長らく競技力向上対策本部の一員として関わってきたため、その点で感想を述べさせていただきたいと思う。

鹿児島大会や佐賀大会にも行ったが、どこの会場においても地元の選手を応援するということや、他府県の選手を応援するというのは同じだが、この滋賀大会で多くの競技会場を回らせていただいたが、曜日・競技・会場を問わずいつも満員だった。滋賀県の選手だけを応援するのではなく、他府県の選手も応援されており、特に滋賀県選手が出場するときは、本当に割れんばかりの応援で、選手たちは勇気をもらったのではないかと感じたのではないかと思った。

「する」「みる」「支える」という言葉があるが、する選手はもちろん、選手を支える競技役員やボランティアの皆さんが一体となった結果が、天皇杯・皇后杯の獲得に繋がったのではないかと思う。まさにスポーツのもつ力というものを改めて実感したところ。スポーツで盛り上がったこの力をどのように残していくのかというのがこれからの大きな課題であると思うし、これをどのように繋いでいくかということを考えることも必要だと思っている。

障スポ大会の開会式や閉会式にも参加させてもらったが、選手の皆さんがいきいきと入場行進をされている姿を見て大変よかったと感じた。

(委員)

先ほどの映像にも出てきたが、カームダウンスペースについては、資料の中でもう少し強調していただきたかったと思っている。カームダウンスペースが全競技会場に設置されたのは、この大会が初めてであり、本当にこれまで苦勞してきた。なかなかこのカームダウンスペース自体を理解いただけなかった。予算がかかるから難しいというところから始まって、カーテンだけでもいい、ソロキャンプのテントでもいいというような話をしながら、何年もかかってようやくこのような形になった。なかなか自閉の子どもたちの特徴は目に見えないので、理解してもらえなかった。ようやく理解してもらえたと思ったら県の担当者がすぐに変わってしまい、また最初から説明す

るということを繰り返しやってきた。自閉症協会の方が本当に苦労されて、全ての会場に設置できた。このことは本当に大変な偉業だと私は思っている。これはそれほどお金をかけたものではないため、壊されずに残してもらえるものになると思っている。また、そこから多くの人が「こんなもんで大丈夫なんだ。」と学んでいただければ、お金がなかったとしてもソロキャンプのテントをそこに置くという形で、引き継がれていくのではないかと考えているので、ここは強調して書いてほしいと思う。

また、私が学びになったのは、開催の2年ぐらい前に、県の方とパラの選手に来ていただき、ボランティアという、どうしてもお手伝いをするというような、少し暗いイメージがあるので、それをやめて「一緒に世界を目指さない？」というような形で学生に呼びかけをしてもらったが、思っていたより学生はしらけておらず、2割程の学生が「ボランティアとして参加したい。」とその場で手を挙げて、実際に行った学生も多かったと聞いている。

もう一つ学びになったのが、「スポーツの指導者として、指導員の資格を取って教えますか。」っていうことで、こちらにも学生が手を挙げて実際現場にも何人かが行ったが、学生が半泣きになって帰ってきて、「次からはもう行けないので、断っていただけませんか。」と言ってきた。「どうしたの？」と聞くと、「大御所の人たちがたくさんいて、怖くていけません。」と言うので、その後、その協会の方ともお話ししたが、上の年齢の人たちが新しい若い指導者をつぶしてしまっている現状が大きな課題ではないかというところも見えてきた。育ててほしいと思うが、なかなか待てないという状況が見えてきた。次の世代の指導者やボランティアをどのようにして獲得して、どのようにして逃がさないようにするかというのは、大きな課題だと思っている。

最後に、全体として気になったのだが、「共生社会＝障害のある人とない人」というような形になっている。共生社会というのは、障害のある人がメインということではない。障害の有無だけの区切りで共生社会の実現と考えてしまうのは問題というか、障害の有無だけではないはず。ここにいる人みんなが心地よく生きていける社会が共生社会だと思うので、表現を工夫していただけたらと思う。そういったことがなかなか浸透していないのが今の社会だと思う。共生社会というと、障害の有無やマイノリティ、LGBTQ+しか出てこないのは悲しいことだと思った。

(3) 滋賀県スポーツ推進計画について

(会長)

本来は、ここで質問や意見をいただく予定をしていたが、時間がなくなってしまったため、後日でも結構なので、質問等があれば県の担当者までお願いしたい。